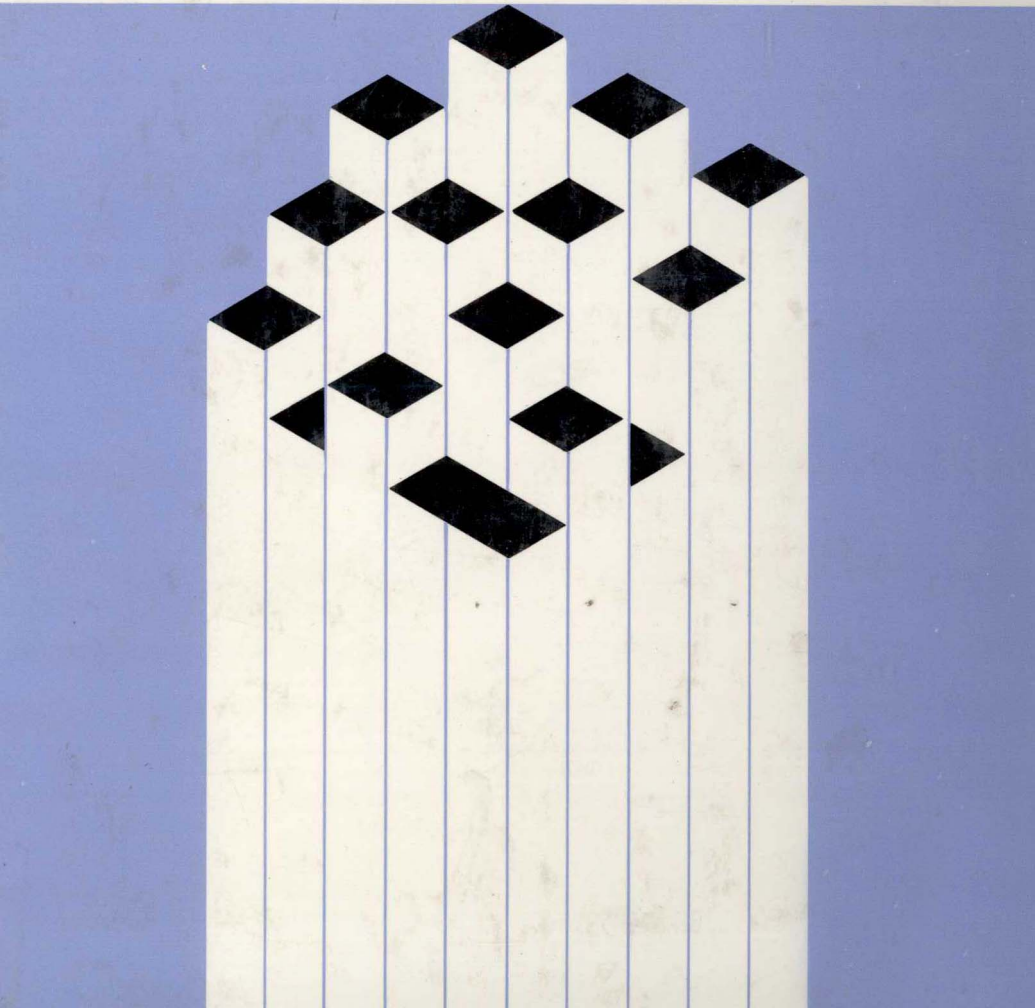
現代アメリカ経営管理論批判

ミリネル=チジョフ編　稲村毅 訳



現代アメリカ経営管理論批判

ミリネル=チジョフ編　稲村毅 訳

法律文化社

訳者紹介

稲村　毅（いなむら　つよし）

1941年　富山県に生れる

1968年　京都大学大学院経済学研究科博士課程修了

現　在　大阪市立大学商学部助教授　経営学史担当

＜検印省略＞　　定価：4,200円

1982・10・30　初版第1刷発行

現代アメリカ経営管理論批判

編　者　ミリネル＝チジョフ

訳　者　稲村　毅

発行者　柴田　穣

発行所　株式会社 法律文化社

京都市北区上賀茂岩ヶ垣内町71

振替京都10617　電話075-791-7131

西濃印刷株式会社・池田製本所

©1982　T. INAMURA.　Printed in Japan

カバー装丁・岡田陽子

3034-103095-7729

日本語版への序文

日本の読者との出会いを大変うれしく思う。

本書は，現代アメリカにおける管理の理論と実践に関するソビエトの専門家による研究の一定の総括である。この研究は，アメリカにおける組織と管理の理論の主要な発展傾向――これらの傾向はしばしば，アメリカの著名な学者ハロルド・クーンツの生き生きした表現によれば，現在のジャングルを形成する種々の流れや学派によって代表される――を明らかにし，60年代以来アメリカの理論的管理思想に生じた変化を解明し，現代アメリカのマネジメントに特徴的な諸過程に関するより具体的な理解を得ようとする努力から生れたものである。

われわれが特に注意を払ったのは，アメリカの管理論の発展，アメリカのマネジメントの方法論における新しい諸傾向の分析，種々の管理水準に適用される具体的な概念と方法の検討である。アメリカにおける生産組織の管理問題の理論的研究の中に相互関連的な3つの局面（断面）が区別され（生産組織が，設定された目的の達成のためのある「合理的」道具，社会システム，および政治的制度とみなされる），現代アメリカのマネジメントの方法論的基礎としてシステム的，状況的，および比較的アプローチが分析された。こうすることによって，アメリカの管理科学の現状，それが研究する問題と提案する勧告の理論的水準についての十分統一的な理解を得ることができる。

本書を繙く読者は，われわれが経済関係の発達した資本主義国のひとつにおける管理についての現在の理論的接近方法，科学的研究，および具体的経験を客観的，全面的に解明しようと努めたことを確認されるであろう。もとより，本書ではアメリカにおける管理問題に対するソビエトの専門家たちの見解が述べられており，当然ながら，彼らはアメリカで形成された理論と概念およびそれらの実践への適用の展望について独自の，ブルジョア学者の立場とは多くの点で異なった見方をしている。外国の理論と実践の

批判的考察によって，その国の強い側面と弱い側面をより良く明らかにすることができるようになると思われる。

管理は，人間活動の重要な領域であり，社会の生産力の発展の強力な手段である。それ故，ここでは科学的思想の交流，外国の経験の積極的，批判的研究，管理領域における各国人民のための最も効率的な組織的・技術的解決の探求は，特に有益であり得る。かかる研究から，われわれはまた，社会経済体制を異にする国々の学者・専門家の間の協力が人間活動のこの分野においても発展する大きな可能性があるという結論を下すことができるのである。

本書が日本の読者に役立ち，関心を呼び起こすことを期待する。

ベ・ゼ・ミリネル

イェ・ア・チジョフ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　　次

日本語版への序文

序　論

第1章　資本主義体制の矛盾の激化とアメリカにおける国家的管理の特質……11

第1節　アメリカの国家独占的経済の危機と脱出路の探求（12）

第2節　国家的管理の諸問題とそのブルジョア・イデオロギーへの反映（34）

第2章　ブルジョア管理科学の危機の深化……50

第1節　アメリカのブルジョア管理論の発展（50）

第2節　ブルジョア管理科学の弁護論的性格の強化と資本主義的管理論の危機（68）

第3章　アメリカの管理方法論における新しい諸傾向の批判的分析……78

第1節　管理方法論における現代的諸傾向。資本主義的管理におけるシステムズ・アプローチ適用の矛盾（78）

第2節　管理の「状況」理論――プラグマチックな転換の試み（106）

第3節　現代的管理における経験主義的傾向の強化。比較的アプローチの方法論的基礎の批判（124）

第4章　ブルジョア企業管理論における「目的的」アプローチの弁護論的性格……144

第1節　資本主義企業の内部諸目的の矛盾（145）

第2節　企業の社会的責任の神話（154）

第3節　管理の形態と方法の企業目的達成への適応概念（160）

第5章　「組織開発」概念，その基本的特徴と社会的志向性……173

第1節　資本主義経営制度の危機の激化と「組織開発」概念の発生（173）

第2節　「組織開発」の理論的基礎と社会的傾向（186）

第3節　「組織開発」――現代ブルジョア管理概念（201）

第6章　現代の人事管理論……215

第1節　「人間関係」学派の危機。人事管理概念の発展（215）

第2節　社会心理学的影響の概念（226）

第3節　現代リーダーシップ概念の社会的本質（242）

第7章　アメリカのマネジメントと科学技術進歩……256

第1節　アメリカの管理概念における科学技術革新（256）

第2節　科学技術開発論および組織開発論におけるコンピュータ化（273）

第8章　国際企業における管理概念……293

第1節　国際企業管理論の発展と矛盾（293）

第2節　アメリカ的マネジメントの発展途上国への拡張の理論（311）

人名索引

訳者あとがき

序　　論

この4半世紀における人間社会の社会経済的発展は，社会的諸関係の根本的な革命的変革によって特徴づけられる。歴史上かつてなく激しい科学技術革命の影響下で生じる，物質的生産におけるのみならず人間活動のあらゆる分野における深い質的変化は，社会の社会的組織化の問題を提起する。社会生活の組織化の新しい社会主義的システムの確立，ソ連邦およびその他の社会主義諸国における社会主義建設の成功，その勢力の絶えざる増大，世界発展と国際関係に及ぼす影響力の一層の増大は，いまや人類の社会的進歩の主要な方向をなしている。

社会主義の魅力は，資本主義世界を揺がす危機的現象の増大を背景に，ますます増大しつつある。資本主義は，それに伝統的に固有な矛盾の激化と並んで，現代的諸条件の下で，新しい，一層複雑で鋭い諸問題に直面している。経済的危機は，通貨危機，エネルギー危機，原料危機，生態学的危機を伴っている。インフレは強度のうえでも期間のうえでもかつてなく大規模になった。

これらすべてが証明しているのは，国家独占資本主義体制は資本主義経済の客観的諸法則の作用の破滅的結果を克服することができず，社会経済的発展過程を合理的に管理することができないということである。ソ連共産党中央委員会のブレジネフ書記長が第25回党大会報告で指摘したように，「いまや誰の目にも明らかである。修正主義者とブルジョア・イデオローグたちによって作り出された主要神話のひとつ，今日の資本主義が危機から逃れることができるかのようにいう神話は論破された。資本主義の不安定性は，ますます明らかになりつつある。資本主義を『健全化』し，資本主義の枠内で『全体的福祉の社会』を創り出すという約束は，明らかに失敗した。[1]」

権力機関，政党，道徳的・倫理的基盤を侵したブルジョア社会の深い思

想的・政治的危機は，組織と管理の現代ブルジョア理論に直接・間接に反映されている。資本主義世界における組織と管理の分野での最近の研究状況は，以前よりも一層雑多な種々の見解によって特徴づけられる。形成されつつあった状況を「管理論のジャングル」と呼んだH.クーンツによって与えられた資本主義世界における組織と管理の理論状況の比喩的特徴づけは，依然として正当である。

資本主義的生産管理のブルジョア理論と実践の本質のマルクス・レーニン主義的評価は，資本主義の下での管理の二重性というマルクスの概念から出発する。それは，一方では，その遂行があらゆる社会的生産過程において客観的に必要な機能として現れ，他方では，社会的労働過程の搾取，生産手段，労働生産物，および労働活動そのものの疎外によって規定された監督の機能として現れる。それだからこそ，レーニンはテイラー主義の批判的研究という課題を提起したのである。彼は「テイラー・システム」のうちに，生産組織の具体的諸問題の解決における科学的成果と，勤労者の資本主義的搾取の強化に規定された側面とを区別する必要性を強調した。テイラー主義のレーニンによる評価は，根本的な方法論的意義をもっている。資本主義的生産の組織と管理の理論と実践に対するレーニン的接近は，最近の条件の下でもまったくその意義を保っており，現代ブルジョア的管理論の批判的分析に際しての指導的原則である。

社会的生産の組織と管理の資本主義的な理論と実践を研究する場合，ブルジョア的論者たちが生産過程の資本主義的組織形態を一定の社会経済構成体と関連しない普遍的なものとして描こうとする志向を，絶えず念頭におく必要がある。この現象の本質は，すでにマルクスによって，「生産の資本主義的諸形態を生産の絶対的形態，したがってまた生産の永久的な自然形態と考えるブルジョア的偏狭さ」[(2)]をもつ同類の理論家たちの見解の分析のなかで深く解明された。

組織と管理のブルジョア的諸理論を考察する場合，それらがブルジョア・イデオロギーの不可分の構成部分であり，現代資本主義社会が遭遇し

ている深い精神的危機の拭い去ることのできない痕跡を帯びていることを考慮する必要がある。これらの，とりわけアメリカの理論の特徴的特質は，そのイデオロギー的・弁護論的傾向，ブルジョア的プロパガンダに資本主義の生命力を基礎づける新しい論拠を付加しようとする志向である。それとともに，ブルジョア管理論は資本家階級自身の思想的団結や，ブルジョアジーの種々のグループ間の諸矛盾，資本の集積・集中過程で深化する諸矛盾の克服を目的としている。

現代のブルジョアジーは，科学的に組織された管理システムに大きな期待をかけ，そこに生産の活性化手段のみならず，恐慌の予防，階級対立の解決，等々の可能性をも見ている。「管理科学」はその代表者たちによって破産の予防，競争の破滅的結果の軽減，生産効率向上などの合理的手段として宣伝されている。そのうえ，「科学的管理」と結びついているのは，合理的な組織と管理によって資本主義が個々の企業の破産のみならず資本主義体制全体の崩壊をも予防できるかもしれないという期待である。

今日，組織と管理のブルジョア理論の現代の発展傾向を考察する場合，われわれは過去10年間におけるソビエトの専門家の研究に含まれている分析と基本的結論が，依然として妥当することを確認し得る。理論の分岐過程が強く発展し続けていると考えることができる。いまや社会的生産の発展の一般的合法則性の解明の統一的な科学的概念の欠如は，個々の資本主義企業の経営活動の経験的研究の増加，事業組織および政府組織の機能の特殊的諸局面の分析によって埋め合わされている。いわゆる「状況」理論，ないし管理への「状況的」アプローチの支配的意義がますますはっきりと現れつつある。それは，組織と管理の分野における理論的研究の実践的意義を高め，管理論を管理活動の実践の方向に，すなわち一定の組織問題を具体的諸条件の下で実践的に解決する可能性を与える諸原則の研究の分野へと改めて方向づけようとする志向を反映している。R．モックラーは書いている，「状況的アプローチは，管理論と管理者訓練に現実性をもたらす。これまであまりにも多くの管理論者たちは過度に単純化した一般理論を発展

させる傾向があり，そのために管理の実際的仕事の現実との接触を失っていた。[3]」かくして「状況的」アプローチの発生は，ますます複雑化する管理実践の前に自己の破産を証明している現在のブルジョア組織・管理論の極めて限られた実践的有効性と結びついている。

「状況」理論の出現は，ブルジョア管理論の方法論的危機のいまひとつの証拠である。もちろん，一定組織の機能の具体的諸条件の分析の重要性を否定することはまったく正しくないであろう。組織と管理の問題をも含めて，あらゆる現象の研究への具体的接近は，科学性の必須条件である。しかし，状況を一般的傾向に対立させ，具体的なものを一般的なものと対立させることは，まったく正しくない。もし研究が，具体的状況の考察のみに限定され，その研究の一般的方法論によって武装されておらず，また所与の状況におけるよりもより一般的な性格をもった根拠ある理論的一般化を避けるならば，かかる研究は不可避的に経験主義の立場に陥ることになる。この方向は，最近ブルジョア管理論者の間に強まっている傾向を背景にして発展しつつある。それは，管理の「最新の方法」によって達成された成功にもかかわらず，指導とは何よりも技法であって，規制になじまず，成文化し得ないものであるが故に，管理の科学はこれまで存在したことがなく，存在しておらず，また原則として一般に不可能であるという露骨な発言とともに現れている傾向である。

この点で極めて特徴的なのは,「実存的管理」の概念で知られるG.オディオーンの見解である。彼は，そのなかで現実の資本主義的管理に働きかけねばならない「状況的限界」の全体系を分析して，すでに60年代半ばに次のような結論に到達した。すなわち，管理の科学的理論は不可能であり，資本主義的経営者を取巻く事情の多くは，「理論的分析を受付けない[4]」というのである。

オディオーンおよび彼に近い若干のその他の理論家たちの見解は，組織と管理の現代ブルジョア理論の可能性についての最も極端な判断の表現であると言わなければならない。しかし，現在の諸理論の実践的有効性への

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

不満や，資本主義的生産の組織と管理のますます複雑化する諸問題の解決を助けるうえでのそれらの無能力の一般的増大傾向を指摘しないわけにはいかない。

組織と管理のブルジョア理論の発展における現代の諸傾向を考察する場合，今日これらの諸傾向を規定している主体的要因のみならず客体的要因をも明らかにすることが必要である。ブルジョア管理論の発展を理解するために，根本的，規定的な意義をもつのは，次の事実である。すなわち，それはその発展過程において必然的に，知識の蓄積やその改善によってのみならず，研究される客体の機能条件の客観的変化による研究問題そのものの拡大によっても命ぜられる一定の修正，変更を受けるということである。

資本主義的生産の「科学的管理」の理論の発生以来伝統的に，企業活動の内部組織に関わる諸問題の研究が目指されてきた。組織論の初期の代表者たちの研究のなかにも，個々の企業にとって外的な諸要因の問題が，自立的なものとして分離されているわけではないが，ある程度存在する。しかし，外的要因への注意は，主に個々の企業や組織の管理の合理化が直接的果実を与えたがために，長い間限られたものであった。組織と管理の理論家たちは，マクロ・レベルすなわち社会全体の水準での経済的問題にほとんど注意を向けなかった。彼らの注意はもっぱら企業活動の内部組織，その課題の最善の解決の追求に集中されていた。そのために，個々の企業の組織性と社会的規模での生産の計画的組織化の欠如との間の矛盾がますます鋭くなった。エンゲルスが指摘したように，「資本主義的生産様式が社会的生産のこの無政府性をつのらせるのに用いたおもな道具は，無政府状態とは正反対のものであった。それは，それぞれの生産企業内で，生産をますます社会的生産として組織してゆくことであった。」[(5)]

生産およびその他の領域の組織と管理の分野を個々の企業の水準で理論的に研究するという方向は，ブルジョア管理論の基本的発展傾向であったし，いまもそうである。しかしながら最近では，組織と管理のますます多

くのブルジョア理論家たちは，企業にとって外的な諸要因に関わる問題に注意を向けざるを得なくなっている。というのは，私企業体制そのものの運命にとっての外的諸要因の決定的意義がますます明らかになりつつあるからである。たとえある意味で，個々の企業の組織と管理の合理化のためにブルジョア科学によって作り上げられた個々の施策の有効性を語ることができるとしても，社会全体の規模で，そして結局はすべての個々の企業で生じている鋭い諸問題の前では，ブルジョア科学は，本書で示されるように，破産していることが明らかになる。

今日かつてないほどに，すべての個々の資本主義企業の管理の前には，企業と「外界」との合理的で確実な結びつきをいかに確立するか，複雑化する経済的・政治的・文化的諸条件の下で自己の企業の方向，役割，使命をいかに規定するかという問題が鋭く立ち現れている。これらの課題に，企業内部の組織的・管理的課題を解決するために作り上げられた諸手段を適用しても，もはや必ずしも実りをあげることはできない。外的諸要因の分析への科学的アプローチとそれに基づく科学的に基礎づけられた仮説の形成の必要性は，まったく明らかである。だがまさにここでこそ，社会の経済的メカニズムの運営の法則性の研究に対するブルジョア管理論の実証主義的・経験主義的アプローチの破産が特にはっきりと現れるのである。

現代ブルジョア管理論においては，外的諸要因の研究の問題は非系統的に提示され，多様なアプローチに彩られている。若干の研究者は，外的要因の存在を一般に否定し，せめて企業の外部環境の本質的変化を予見しようとする企業の試みをも「不生産的活動」とみなし，その代りに「内的および外的柔軟性」を獲得し，「投資を多様化する」よう提案する。管理への「科学的」アプローチとしては，ブルジョア学者たちによって意識的に理想化された，世界市場におけるアメリカ国際企業の行動が推奨される。

ブルジョア的研究者の他のグループは，ある外的要因と他の外的要因との勝手な分離を仮定する。彼らは数学的モデル化の方法を適用する（たとえば，統計的外挿法によって市場予測のモデルが作られる）が，しかし極めて疑わし

い，決して完全ではない資料の統計的処理にのみ止まっている。

さらにもうひとつの研究者グループは，多要因分析の方法をより徹底的に適用しようとすることを特徴とし，外的要因に関係し，企業の運命に影響する多数の変数を検討する。しかし多要因分析は，社会経済的な社会発展の過程の因果的説明を与えるような科学的に基礎づけられた理論に立脚していないので，結局，然るべき科学性は確保されない。たとえ純数学的観点から見れば，適用される方法は根拠のあるものであるにしてもである。

同時に，発展の論理そのものが次のような疑いのない事実，すなわち社会の生活全体の合理的な，科学的に基礎づけられた組織なしには，この社会の「細胞」たる企業の科学的管理は不可能であるという事実を確証している。ところがこれを，資本主義は保障することができないのである。統一的社会システムの諸環のかかる依存性は，生産力の発展につれてますます増大する。だから管理論は，実践の客観的要求に遅れないためには，その視線をこれらの現実的諸問題に向けねばならない。現代的解釈における管理科学の問題領域の境界はますます広く拡がり，今日では社会全体規模での，つまり国境内での生産の科学的組織の問題のみならず，また世界的発展過程の管理の問題をも含んでおり，その意義は科学技術革命の一層の展開につれてますます大きくなるであろう。

本書は，アメリカのブルジョア管理論における最も大きな現代的諸現象の批判的分析にあてられている。現代の諸条件の下での組織と管理の問題は本来，企業に限定されることはできないものであるから，ブルジョア的管理概念の批判的分析もまた，資本主義国家の経済の国家独占的規制を研究する種々の理論，とくに経済学的理論を，視野の外におくことはできない。今日成立している国家独占的規制の体系は，資本主義的生産様式のますます増大する矛盾によって規定された長い発展過程の結果である。

ブルジョア経済学は，資本主義のますます複雑化する社会経済的諸問題の解決を発見しようと努めている。組織と管理の理論におけると同様，

この分野でも混乱が支配し，実に種々の互いに排除し合う見地が述べられている。その際，特徴的なのは，資本主義経済の規制において計画的方法を強化しようとする志向である。ブルジョア経済学者の間では，社会主義諸国における国民経済的計画化の理論と実践への関心が強まっている。もっとも，私企業体制の運命を恐れて，国家的規模での計画化の導入のあらゆる試みに反対する者もいる。概して，何らかの形で発展過程を規制し管理する必要性を認めて，社会経済的過程を自然発生的に規制する資本主義市場をまったく信頼しない考え方が，ますます支配的になりつつある。

現代ブルジョア管理論で主要な位置を占めているのは，社会システムの合目的的方向づけと計画化，組織化，統制，および動機づけの諸過程における目的設定の支配的役割とから生ずる諸概念である。これらの概念は，実際上すべてのアメリカの管理論に，また経営の実践に反映されてきた。それ故，「目的的」アプローチは，本書では現代管理論の特徴のひとつとみなされる。「目的的」アプローチに基づいてブルジョア理論家が，プログラム別・目的別構造の構築やより有効な統制・刺激化システムの創出のうえで多くの方法的・実践的に有益な研究を行うことができたことは否定できない。しかし，これらの研究の適用の経験は，それらが資本主義的生産関係の敵対性によって生み出された大規模生産組織の根本的な欠陥と矛盾を除去することができないばかりか，多くの場合それらを一層鋭くすることを証明している。

アメリカにおいて70年代は，60年代に特徴的だった管理における情報，サイバネティックス，組織のブームが期待された結果をもたらさなかったことを示した。組織の人間的潜在能力を十分完全に動員しないで，主に技術的・組織的手段と資本主義的合理性に基づいて必要な生産増大と生産効率向上を確保することは非現実的な仕事であることが判明した。このような状態の下で，ブルジョア学者たちは，ブルジョア的管理の問題の解決に行動科学の成果をより広く利用し，管理における種々のアプローチの大き

な統合を達成しようと企てた。かかる新しい管理手段の追求は,「組織開発」の概念の形成をもたらした。その真の目的は，賃金労働者の労働強度の強化のより繊細な，より隠蔽された形態を見つけ出し，資本主義的生産で利用され得る従業員の知識，能力，人格的資質を搾取対象にすることにある。

現段階では，組織における人間の問題の解決へのブルジョア理論家のアプローチは変化しつつある。60年代末から70年代にかけて，「人間関係」学派の危機が生じた。

方法論的には，この研究分野において「状況的」アプローチの影響が強まっているが，これは経験主義の立場の強化を意味し，「人間関係」学派の枠内で研究されてきた人間への社会心理学的働きかけの普遍的理論の崩壊，1つの学派内部における多くの小さなしばしば矛盾しあう諸概念の出現と共存をもたらす。かかるアプローチは，人間活動の組織化における意識の役割を無視し，もっぱら外部環境の諸要素の操作によって必要な行動形態を人々に形成させることができると説く行動主義の反動的思想に大きく道を開くものである。

ブルジョア管理論は，科学技術進歩の成果の適用によって生産組織に持込まれる諸変化を反映しないわけにはいかない。この点に関して，ブルジョア理論にはいわゆる「革新」概念が広く普及している。それは，科学技術革命の諸条件への企業の適応を保障し，同時に科学技術の成果の適用によって社会関係の中に引起こされる深い社会的諸過程の真剣な科学的分析を回避することを使命としている。

アメリカのブルジョア理論家たちは最近，国際企業の活動を最善の形で特徴づけ，それを資本主義的生産の国際的規模での組織化における新しい段階,「慈善的使命」と他国の経済発展の世話として描き出すために少なからぬ努力をしている。ブルジョア理論家たちは世界的規模における「最適戦略」と「効率的」管理システムの理論的基礎づけを与えようとしている。彼らは国際企業の理想的管理構造とその活動の「合理的計画化」，さらには原料利用の種々の理論的図式を提出しようとし，あたかも販売市場をめぐ

る競争戦よりも「協働」の有利を認め，発展途上国を含む他国との協力の方法と形態の構築に関心をもっているかのようなある新しい戦略をもったアメリカ独占資本を描こうとする。実際，本書で証明されるように，問題はアメリカの他国への「経営拡大」の理論的基礎づけの試みである。

組織と管理の現代ブルジョア理論は極めて種々の流れ，学派，方向によって代表される。その内部で，互いに著しく両立しない諸概念が作り上げられている。見解の根本的相違は，ある同一の学派内部の論者間にもある。その際，問題となるのは科学進歩の推進力のひとつたる意見の不一致や討論ではなくて，管理の組織的過程の科学的研究を，歴史的に廃れてしまった社会経済的諸関係の弁護と結びつけようとするブルジョア理論家にとって不可避の試みから生ずる方法論的矛盾である。換言すれば，これらの矛盾は資本主義的諸関係の敵対的性格を反映しており，すべての管理が何よりも勤労者の搾取の特殊形態として現れるブルジョアジー支配の下では，生産の最適管理の方法を発見しようとする試みが無益なことを証明している。資本主義的管理の二重性は，この社会構成体の本質そのものから生ずる。まさにその故に，ブルジョア「管理科学」は，資本主義が存在する限り真に科学的になることはできないのである。

(1) 『ソ連共産党第25回大会資料』モスクワ，1976年，28頁。

(2) マルクス『剰余価値に関する諸学説』『マルクス・エンゲルス全集』第26巻Ⅰ，400頁（邦訳，第26巻Ⅰ，500頁）。

(3) R. J. Mockler, Situational Theory of Management, *Havard Business Review,* 1971, No.3, p. 151.

(4) G. Odiorne, The Management Theory Jungle and the Existential Manager, *Academy of Managenent Journal,* February 1966, p. 111.

(5) エンゲルス『反デューリング論』，『マルクス・エンゲルス全集』第20巻，284頁（邦訳，第20巻，282頁）。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com